

レポート (博物館教育論)

博物館・博物館学芸員のこれからについて

—博物館教育論で学び、考えたことを通して—

久保美彩子¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学国際文化学部在学学生

博物館が一般市民のための教育の場であることは、博物館法の第一条にも書かれており、博物館の存在意義の一つであると言っても過言ではないものであると考える。しかし、現在の日本で博物館法が定める「博物館」は、「博物館」を名乗る施設の内のごく限られた割合しか存在しない。実際にここ鹿児島県でも登録博物館や博物館相当施設は少なく、またそうした施設も財政難により運営状態が厳しいことも多い。そうした中で、博物館のあり方として一般市民への教育を行っていくためには、やはり博物館自体も常に学ぶ姿勢をなくさないことが大切であると考えます。

今回、実際に県内の博物館で働いている博物館学芸員に直接意見を聞く機会は得られなかったが、県立博物館などは積極的な企画展示やイベントの開催を行っており、一般市民への教育の場を提供する意欲が感じられた。こうした博物館の取り組みは、創意工夫による博物館としての一つのあり方の例と言えるのではないかと考える。財政難や人員不足などの問題も多いが、そうした中でも工夫次第で博物館としての意義を果たすことができるのが、学芸員としても、博物館としても理想的である。寧ろ、財政的にも優れ、所蔵する資料が多い博物館でも、地域への貢献や一般市民への教育に対する意識が低ければ、それは博物館としての大切な義務を果たしていないということになりかねないのではないだろうか。

博物館は貴重な資料や文化財を所蔵し、保護管理することも大切な役割の一つであるが、実際に展示して公開することのできる資料は全体のうちのほんの僅かな数であり、そもそも所蔵できる数にも限りがある。しかし、学ぶことによって得られる知識や経験には限りがなく、知的好奇心が刺激されればされるほど学びの意欲は高まっていくものである。博物館はそうした知的好奇心を刺激し、一般市民の生活に常に学びや発見を見出すための新たな視点を提供

する必要があると考える。

博物館が常に学びの姿勢をなくさないということは、学芸員が一般市民に対しての教育に、上から目線の考えをなくしていくことが必要であると考えます。学芸員は一般市民に教育の機会を与える存在ではなく、市民との活動や教育を通して、一緒に学んでいくという姿勢が必要である。学芸員としての学びは、博物館を訪れる多様な人々のニーズに応えるための知識や、研究のための勉強などであり、博物館としての学びは前述のような、創意工夫による一般市民への学びの場の提供の模索などが挙げられる。

人間が学びを得る場面は様々あるだろうが、やはり最も効果的であり簡単な方法は、自分と異なる考えを持つ人と意見を交わすことである。より多くの人と意見を交換することで新しい視点を得ることが出来るだけでなく、自分の意見をより分かりやすく相手に伝えられるようになったり、自分の意見をより深めたり、より良い方向に修正したりすることが出来るはずである。これは立派な学びの一つであり、人との関わりを持つという点で非常に大切なものであると考える。博物館は、そうした機会を広く一般市民に提供することのできる施設の一つであると考えます。

また博物館を訪れるのは老若男女、学歴を問わない実に多彩な人々であり、多くの意見を聞くことの出来る社交の場としての性格も持つことが出来る。学芸員も、そうした多種多様な人々のニーズに応えるために常に自分を高めていく必要があると考える。具体的には、子どもにも大人にも、専門性のあるひとにもそうでないひとにも、納得のいく答えを返すことができるようにするということである。さらにそのために大切なのは、子どもや専門性のないひとだからと言って、答えの質を落としてはいけないということである。

博物館は教育の場であるが、博物館の提供する教育が常

に博物館の中である必要はないはずである。博物館には課外活動、生涯教育の場としての機能が存在するため、博物館がない地方などで行う出張イベントや、館外でのフィールドワークなどのアウトリーチ活動も積極的に行っていく必要があると考える。

アウトリーチ活動により、博物館にあまり馴染みのないひとが博物館についての知識を深める、博物館が身近になることによる教育を提供する施設がないことのフォローなど、一般市民の教育に対する認識を改める効果がある。それだけでなく、博物館側もそうした教育の機会が必要な地域や一般市民について知ることができるというメリットもあると考える。鹿児島県は全国でも有数の離島の多い県であり、博物館がない離島も多く存在する。そうした教育の機会が均等に得られていない人々に対して教育の機会を提供することは、博物館にとって必要な活動ではないかと考える。

またそうした活動を通して、地域の文化財に対する地域の人々の認識を改めることができれば、地域に対する愛着や文化財に対する正しい知識、誇りのようなものの獲得にも繋がるのではないかと考える。地域の人々が文化財の重要性に気づかず、貴重な資料がなくなってしまうなどの事態を防ぐためにも、こうした意識改革は大切な教育である。そして、博物館を利用する機会のない人々に対して、教育の必要性を少しでも感じてもらうことが出来ればよいと考える。

アウトリーチ活動はそうした地方だけでなく、博物館が身近にありながら博物館をあまり利用しない多くの一般市民に対しても積極的に展開していく必要があると考える。例えば親子で参加できるようなイベントであれば子どもに学びの楽しさを教えることができるばかりでなく、親にとっても学校以外での学びの場について知ってもらうことができ、また親自身も学びの機会を得ることができる。このように、気軽に参加できるイベントなどを展開することで博物館に対する親しみや身近さを宣伝していくことが、博物館が一般市民の学びの場であることを周知するために必要であると考え。

博物館が学びの場であること自体も学びの一つであり、学校などで教えていく必要がある。また、大学で学芸員資格を取ろうとする学生に対しても、そうした意識を持ってもらうことが大切であると考え。本学でも学芸員資格をとるための講義に博物館学芸員を教員として採用しているため、その講義のなかで学芸員を目指す学生に対して学芸

員として必要な自覚や知識を教えていくなど、地道な活動が必要なのではないだろうか。

アウトリーチ活動を行うなかで、ボランティアなどの協力者を得ることも大切であると考え。博物館学芸員の採用枠は極めて少なく、学芸員が本来行わなくてもいいような雑務まで担当して本来の研究を行えないなどの問題がある以上、館内、館外の活動を問わず、よりよい教育の機会を一般市民に提供するためには協力者を得る方が効率がよいと考える。実際にボランティアに協力してもらっている博物館も多いが、ここで大切なことは協力してくれるひとびとにとっても、その活動が自らを高める教育的側面を持っていなければならないということである。博物館での活動を通して、日々の生活に張り合いが出たり、学ぶ意欲をかき立てられたりといったプラスの効果がなければそうした活動は続いていかないだろうし、また博物館を訪れた人々もそうした人々の姿を目にすることで博物館に対してプラスのイメージを持つはずである。

そもそも生涯学習とは人生の余暇を学びに使うためのものであり、多くの人々が余暇を持って余しているはずである。博物館は、そうした余暇を持って余しているひとびとの受け皿になるべき施設であり、またそうしたひとびとが本来学びを得るために訪れるための施設である。世界有数の博物館の数を誇る日本では本来、生涯学習の機会を多く得られるはずであるが、一般市民に博物館の重要性が正しく理解されているとは言い難い現状ではそれが難しいことになっている。

しかし実際には何かをしてみたいと思っているひとは多く存在しているし、実際に活動を行っている人も存在している。そうした人々と上手く連携をとる、というのも博物館に多くの人を呼び込むための手段となりえるかもしれない。そうした人々は博物館のイベントなどに参加してくれる可能性も高いので、そうした機会を通じて博物館での学びについて知ってもらうことで協力者となってくれば、博物館としても、学びの機会を必要としているひととしても、相互にメリットがあるのではないだろうか。

博物館の教育に関して、やはり一番に重要なことは博物館、そしてそこで働く学芸員の意識の高さではないかと考える。博物館が訪れた一般市民に対して常に真摯に学びの場を提供することが出来れば、あまり博物館に興味のなかったひとでも博物館に対してよい印象を持つことはそう難しいことではないと考えるし、もともと興味のあった人はどんどん学びを求めて博物館を訪れるはずである。

日本の学芸員は、海外と比べて資格をとるのが容易であるが、博物館学芸員としての高い意識さえ持っていれば、自ずと優秀な学芸員が育っていくのではないかと考える。高い意識をもったひとは自然と知識や教養を学んでいくはずであり、そうしたひとは博物館学芸員として採用される可能性が非常に高いといえる。そして優秀な学芸員が増えていけば、博物館全体も変わっていくのではないかと

考える。

もちろん、学芸員にならなくとも一般市民として博物館を利用する私たちも、こうした講義で学んだことを生かして博物館に対して正しい知識を持ち続ける必要がある。少しでも多くのひとびとが博物館に対する理解を深めていけば、学びを求めて自然と博物館へ向かうような社会になるのではないだろうか。

